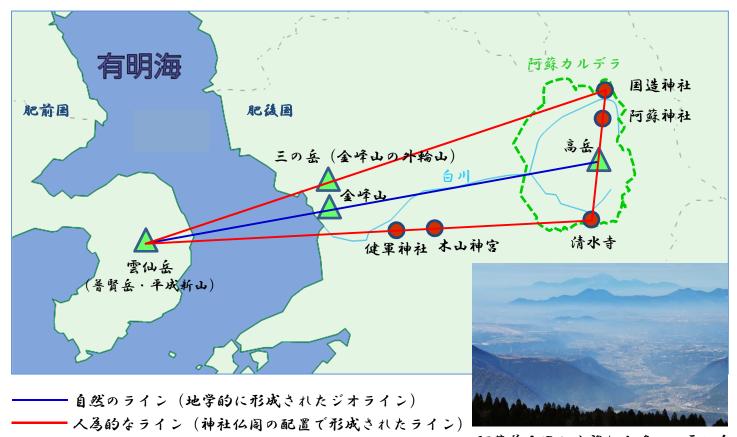
雲仙岳と阿蘇山①

「雲仙岳の 秘めたるパワー」 P.28

●雲仙岳と阿蘇山の古代からのつながり

現代、雲仙岳と阿蘇山のつながりが話題とされることはほとんどありませんが、実は古代には並々ならぬ深い関係があったことが神社仏阁の配置から読み取れます。雲仙岳・金峰山・阿蘇山(高岳)は同じ火山帯に属し、東西にほぼ一直線上に並んでいますが、そのラインを軸に<u>雲仙岳と阿蘇山を大三角形で結ぶような配置</u>で、古代創建の神社仏阁が並んでいます。これは、有明海の東西にまたがる古代の肥(火)の国において、西(肥前)にそびえる雲仙岳と東(肥後)にそびえる阿蘇山が2大火山として重要視され、西山の位置関係をベースに国づくりが進められていったことを示唆しています。 (ご参考 ⇒ http://tizudesiru.exblog.jp/i51/)



阿蘇革千里から望む金峰山・雲仙岳



態本市最古の健軍神社の参道 約1、2kmの参道(八丁馬場)の 光に、雲仙岳が正面に現れる。

雲仙岳と阿蘇山②

「雲仙岳の 秘めたるパワー」 P.29

●雲仙岳・阿蘇山と有明海

時代をもっとさかのぼれば、雲仙岳と阿蘇山のさらなるつながりが見えてきます。雲仙岳と阿蘇山にはさまれた<u>有明海</u>には、現在<u>日本一の面積を誇る広大な干傷</u>が広がっていますが、これは大量の土砂を運び込む多くの流入河川、波静かな奥の深い入江などの条件が整っているためです。有明海沿岸には筑後川や白川をはじめとする多くの一級河川が流れ込みますが、実は、約30万~9万年前に阿蘇山が巨大噴火した際に九州北部全体をカバーした噴出物を運び込んでいるのです。その大量の土砂がなぜ外洋に流れ出さないかと言えば、雲仙岳・島原半島が存在するためです。もしも約50万年前に雲仙岳が活動を用始せず、小さな火山島のままで島原半島になっていなかったなら、外洋の彼が直接有明海に打ち寄せて、大量の土砂が外洋に流れ出したことでしょう。有明海の広大な干渇は、阿蘇山と雲仙岳の"阿・雲の呼吸"とも言うべきコラボによって成立しているのです。





もしも雲仙岳が存在 しなかったなら・・・





コラム:吉野ヶ里遺跡

佐賀県内陸部にある吉野ヶ里は、 古代には有明海沿岸にあり、その 後の干拓で内陸部となりました。 実は、吉野ヶ里遺跡の建物配置の 中心線は、雲仙岳を向いていました。 古代の人は、有明海の干潟越りを 空仙岳を眺めながら、町づくりを 進めていったと考えられています。